

宇宙理学委員会 委員長 殿

平成12年2月10日の宇宙科学研究所に於ける M-V-4号機による、ASTRO-E 衛星の軌道投入の失敗にあたり、高エネルギー宇宙物理連絡会は以下の要望を行うものです。

X線天文学は、1970年代以来、主に日、米、欧の協力と競合のもとに発展してきたといえます。その中において、日本は黎明期より主要な役割を果たし続けることができました。その過程では、4機の X線天文衛星を継続的に打ち上げてきた宇宙科学研究所の寄与すること、大と考えます。その結果、いまや X線天文学は世界をリードする日本の基礎科学分野の1つとして周知されるに至りました。日本の基礎科学を支える重要な柱を持ち得たことを、我々関係者は誇りと思うものです。ASTRO-E 衛星は、その日本の X線天文学の成果と活力を継承、発展させるべく第5番めの X線天文衛星として日米の国際協力の下に準備されてきました。

新千年紀の世界の X線天文学を担う衛星として、1999年7月に米国の「チャンドラ衛星」、12月に欧州の「ニュートン衛星」が打ち上げられ、既に観測を始めています。これに続いて日本の ASTRO-E 衛星が参入する予定でした。これら3機の大型 X線天文衛星はそれぞれに相補的で、かつ従来を凌駕する高性能 X線検出能力を持つが故に、一つとして欠かすことのできない戦略的な衛星でした。特に ASTRO-E は「あすか」を10倍も上回るエネルギー分解能と、線までのびる広いエネルギー範囲に感度を持ち、ダイナミックに激動する「極限宇宙」(The Extreme Universe)の解明へ、最も効果的に切り込むミッションとして、世界から大きな期待が寄せられていました。この度、ASTRO-E の衛星の軌道投入に失敗したことは、新千年紀の宇宙科学の大戦略をつまずかせ、世界の基礎科学の進歩を大きく妨げる結果となったと言わざるをえません。

国内においては、日本が誇る X線天文学の継続性と独自性に、また世界に対しては、この分野の指導性に赤信号がともったこととなります。今回の失敗によって、日本の誇る基礎科学分野の一つが停滞の危機に直面する事はなんとしても避けなければならないと考えます。日本の X線天文学が世界に対してリーダーシップを取り続けること、それは日本が「知的存在感のある国」として世界に大きく寄与することでもあるからです。

私達は以上の広い視点から、ASTRO-E、あるいはそれに代わる X線天文衛星の早期実現を強く要望するものです。

これまで、宇宙科学研究所は、たゆみない技術開発を続け、継続的に科学衛星を打ち上げて来ました。この実績を継承し続けるためにも、早急な原因の究明とさらなるロケット開発、関連する科学技術の推進も併せて希望するものです。

平成12年3月17日

高エネルギー宇宙物理連絡会

この文書は、高エネルギー宇宙物理連絡会の活動の一環として、会員の総意にもとづいて提出するものです。なお、高エネルギー宇宙物理連絡会とは、高エネルギー宇宙物理学に関連する研究者が作る任意団体で、現在、会員は99人に上ります。名簿および会の趣旨説明文を添付します。詳しくはホームページ

<http://wwwxray.ess.sci.osaka-u.ac.jp/kouuren>

を参照して下さい。(高エネルギー宇宙物理連絡会：事務局長 北本俊二)